第456号 昭和58年6月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1983年（昭和58年）
6月号（No. 456）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

青山学院の鹿島槍の記録
山崎安治……（1）
新緑の河内で
播隆上人顕頌碑除幕式
富山支部……（2）
―海外の山から―
メスナーの意欲……（2）
カナダ山岳会
夏季キャンプ参加記（下）
斎藤健治……（3）
門田のアイゼンが世に出た頃（上）
広瀬　潔……（4）
東西南北……（5）
第二十回
この一本展（1）　図書委員会……（6）
報告　指導委，図書委……（7）
図書紹介……（8）
"チョゴリ登山記二冊とK2西稜
登攀記"ほか
お知らせ……（6）（10）
ルーム日誌・会員移動……（10）～

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

青山学院の鹿島槍の記録

山崎安治

鹿島槍ヶ岳の積雪期登頂記録を調べているうち、いままで知られていなかった新しい記録を探り当てた。数年前、大町鹿島の〝山のおばばの家〟（鹿島山荘）に泊ったとき、まだおばば（狩野きく能さん）は元気で、有名な「登高記念帳」を見せてもらったことがある。おばばが亡くなったのは昭和五十二年一月だから、その一年ほど前の夏のことだが、堀田弥一氏の「昭和五年十二月十八日、快晴を迎ひ鹿島槍ヶ岳に登頂す。昭和五年十二月二十六日」という記帳などいくつかノートに書き留めてきた。その中に「昭和七年十二月二十四日、青山学院山岳部大塚信久、中隈武夫、鹿島造林小舎を出発、笹喰より左俣を登り、ゴルジュ状の上にスキー・デポす。斜面急にして非常に悪し（北槍と南槍の間のゴルジュを登り北槍に登頂）」とメモしてある。カッコ内はもっと詳しく記されていたのを要点だけ書いたものだが、積雪期の鹿島槍ヶ岳登頂の記録を集めてみると、厳冬期の鹿島北槍に、北俣本谷をダイレクトに登り、吊尾根に達し登頂したのは青山学院の記録が最初のものであった。

積雪期の鹿島槍登頂の年譜は次のようになる。（不登の記録は除いた）

①大正十五年三月三十一日、一高旅行部浜田和雄、石原巌、鹿島村から爺岳を経て積雪期初登（石原氏は『一高旅行部五十年』の「雪の鹿島槍ヶ岳」に「ようやく鹿島槍ヶ岳北峰着、午後二時二十分、これまでが精一杯であった」と書いているが、北峰とあるのは南峰である）

②昭和五年三月二十二日、立大逸見真雄、小原勝郎、案内桜井一雄、鹿島村から北俣中岩沢をつめ国境尾根に立ち鹿島南槍積雪期第二登。

③昭和五年四月三日、神戸商大田中伸三、藤井隆蔵、富川清太郎、鎌尾根から第三登。

④昭和五年十二月十八日、立大斯波悌一郎、堀田弥一、案内桜井一雄、鹿島造林小屋より鎌尾根を経て厳冬期初登。

⑤昭和六年一月一日、東京商大磯野計蔵ら、案内山中彦一、爺岳小屋から国境線伝いに厳冬期第二登。

⑥昭和六年二月十二日、加藤文太郎単独で鹿島村から冷池を経て厳冬期第三登。

厳冬期鹿島北槍の登頂

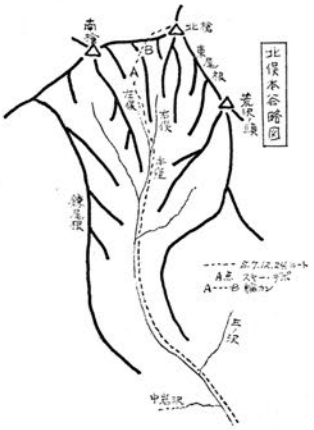
（北俣本谷より）

大塚信久

昭和七年十二月二十四日、鹿島造林小屋（〇・三〇）―西俣出合―笹喰（六・〇〇）スキー・デポ（二・〇〇）―北槍（三・〇〇）―造林小屋（八・三〇）

基地を鹿島村より造林小屋へ移す。西俣出合（二俣）への道は夏道を避け沢筋にとる。水量少なく渡渉数回、二俣より笹喰までは夏に見られた数米の岩石も積雪に埋もれて起伏もない純白のスキーゲレンデである。高度を増すにつれて笹喰付近は亀裂が生じており粉雪が舞い上がる。この付近は黒部側からの風の影響が大きく、本窪付近に達した頃は吹雪となり、時折り猛烈な奴がやってくる。

これから上部は急斜面で雪も深く、輪かんでは不能。ターンは困難だが狭い谷をジグザグに登る。左右の岩壁から小さな泡雪崩が降り注ぐ。二五〇〇米のゴルジュ状の上部に達したのは二時。本窪より八時間近くを要した。このあたりは両側が壁状になり尾根に取り付けない。ゴルジュを抜けた上部をスキー・デポとしてここから輪かんで登る。胸までもぐる五十度近い



山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

留守番電話（電話番号234―六六五九）

斜面である。北槍からの支稜に取り付き、アイゼンにはきかえ、やせた岩場をすぎると吊尾根である。南槍の北面は優秀に雪を付けている。黒部側より吹き上げる激しい風で目が痛い。劔は目前に控えている。太陽がかすかに現われ、遠見尾根を隔てて、真白な八方尾根が望まれる。カクネ里は見えないが、天狗尾根は雪庇を乗せてのしかかっていた。

（付記）登高中、笹喰付近で数ヵ所板状雪崩の潜在個所を目撃した。この現象はこのあたりの地形がオーブンになっており、黒部側の烈風が運びくる風成雪の作用であろう。この日、造林小屋内の午前零時半の温度は摂氏零下二十度。鹿島村でも異常な冷え込みであったという。二五〇〇米のゴルジュ付近では風の影響は少ないが、登高は急斜面と湿潤性の雪、地形の狭小のためスキーのターンは思うにまかせず苦闘した。冬期登山者には、この地域の風成雪崩が一大関心事である。特に風成凍雪の滑落と、その流動に伴う乾燥性新雪雪崩は予期し得ない。

北槍より派出する右俣の積雪期の登高は非常に困難であろう。四月末、後立山縦走のとき、この谷を下降するのにザイル使用を余儀なくされた。雪が春の陽光でくさり、苦労の末二俣へ下り鹿島村へ出た。

（後記）この登高記は半世紀前青学ＯＢレポートⅡに載せた記録に添記したものである。この登高に同行した後輩の中隈武夫君が凍傷で両指の切断は免れたものの、以後の山行に支障を来たしたのは残念である。

⑦昭和六年三月三十日、立大堀田弥一、小原勝郎、東谷野営地より鹿島槍登頂、越中側からの初登。

以上の記録を総括するといずれも三角点のある南槍の登頂で、昭和六年四月三日、京大伊藤愿、工楽英司、長谷川清三郎の隊は五竜から鹿島槍への積雪期初縦走を記したが、これもキレットの露営地から越中側を巻き、北槍と南槍のコルに出て南槍に立っていて、北槍は踏んでいない。

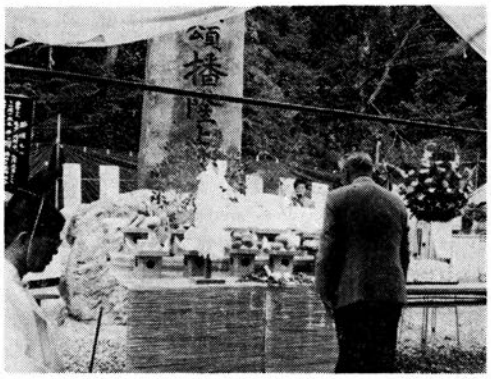
これまでの記録からいうと、積雪期の北槍に立ったのは昭和八年一月四日、立大斯波悌一郎、湯浅巌が厳冬期の白馬岳、鹿島槍、爺岳初縦走の途中、キレットから稜線沿いに北槍に達し、南槍を通過したのが最初であった。青山学院の記録はこれに先立つ厳冬の北俣本谷からの北槍初登で登山史上からもきわめて重要なものである。このほど鹿島の「登高記念帳」の話から青山学院ＯＢ中川武氏を通じ大塚氏が健在であることを知り、同氏にその登山概要をあらためて書いていただいたので、ここに発表しておきたい。

新緑の河内で
播隆上人顕頌碑除幕式

富山支部

黄砂の影響かそれとも新緑の霞のためか薄曇りの昭和五十八年五月八日、前人未踏の槍ケ岳（三一八〇㍍）開山の祖「播隆上人」の顕頌碑除幕式が上人の出生地富山県上新川郡大山町河内（越中国太田組河内村ハ現在は廃村ヾ）で挙行された。

上人は天明二年（一七八二）の生れで二百余年前のことになるが、その頃の河内は非常な僻地である上に藩令の定めが厳しく、加えて天候の異変による土地の生産力が低く、社会的に二重三重のパンチを受け、住民は心のよりどころを念仏生活に求めた。そこが「川内道場」で播隆上人の生家であった。



顕頌碑前で拝礼する佐々会長／撮影・野島福三郎会員

上人の幼名は庶民であったためか知る由もないが、伝えられるところによると上人は農作業や山の仕事は上手でなく、暇があれば砂上や灰上に文字を書くのを常としていた。それが唯一の遊びであったようである。その播隆が或る夜突然遁世の途についたのである。時に十二歳とも、二十四歳とも二十六歳とも伝えられ、指物職人としての修業も意の如くならず、養子先の愛妻と死別したり、供養のためか川内道場の再興のため出家の途を選んだとの諸説もあるが、地域的社会的に真相の究明が必要である。

顕頌碑の除幕は播隆上人出生家中村家の末裔、中村俊隆氏をはじめ、河内に関係のある老若男女や

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

—海外の山から—

メスナーの意欲

メスナー（三八）が五月五日、チョー・オユー（八一五三㍍）に登頂、これで八千㍍級十四座のうち十座を落し、通算十二度登ったことになる。残されたピークはダウラギリ主峰、ローツェ、マカルー、アンナプルナ主峰の四座で、明年の目標はダウラギリに絞っている。

彼は一九七七年のプレにダウラギリ主峰南壁登攀を試みている。当時のメンバーはオーストリアのペーター・ハーベラーのほか、オットー・ビーデルマン（西ドイツ）、マイケル・コビントン（米）であった。しかしこの計画は途中放棄、その翌年イエティ同人の雨宮節隊が柱状南岩稜ルートを開拓した。残された未開の南壁をたどるか、三稜沿いのノーマル・ルートをたどるか、明年の話題の一つになる。

今回のチョー・オユー登攀はネパール、イタリア、西ドイツの合同形式を採用したが、同峰へは昨年冬期に登攀を試みており、強風による落石、雪崩の危険から、九死に一生の態で断念したわけである。

一九七〇年のナンガ・パルバートのルパール壁から始まる八千メートル・ジャイアンツ登高の年

縁のある人々、大山町当局、日本山岳会本部、支部の会員など一百有余人の見守る内に山崎美和子、河上洋子さんの手によって行なわれ、柴田正美さん外十名の少年少女による献花、神官の祝詞、玉串奉呈の順で除幕式を了えた。日本山岳会からは佐々保雄会長はじめ、吉沢一郎氏、福井正吉氏、折井健一氏、沼倉寛二郎氏等が参列、槍ケ岳開山者の祖に相応しい除幕式であった。

神宮の祝詞（別記）は周囲の新緑の山野に朗朗と流れ、参列者の中にはハンカチを目頭にあてる人があったが、複雑な感情にひたり古い時代の河内を偲んだのであろう。

石碑は重さ約十トン、播隆上人が笠ケ岳再興時踏んだと考えられる高原川の栃尾谷から採石した安山岩に、日本山岳会富山支部長中田清兵衛さんの墨跡を刻み、副碑の「顕頌之記」（別記）は広瀬誠氏の文である。設計、施工者は会員の浜田石苑建設株式会社社長浜田文二氏である。（石坂久忠）

「顕頌之記」

播隆上人、越中河内村、中村順信次男としてこの地に出生、仏道に志し諸国を巡錫、独修独行、文政六年飛騨迦多架嶽即ち笠ケ岳を再興、難路を拓き恭しく頂上に仏像を安置、槍ケ岳の天際に聳え立つを仰ぎ登拝の念勃々として止み難く信州より入山すること数次、辛苦を重ね文政十一年七月二十日遂に峻嶮の絶頂を極め仏像を奉安して感涙に咽ぶ、ウエストンの槍登頂に先立つこと実に六十有三年天保二年生家念仏道場再興、播隆さらに万人槍ケ岳禅定のため東西に志を募り藩吏農民の迫害に屈せず天保十一年八月宿願の鉄鎖山壁取付成る。同年十月二十一日美濃太田にて大往生年五十九、不屈の越中魂よく未踏の峻岳を開き山岳渇仰の清志永く岳界を奮ひ起たしむ。

世の人の恐れ憚る槍の穂も
やがて登らんわれにはじめて
播隆

播隆上人顕頌碑除幕式祝詞

清き流れの熊野川の源、大山町河内の里、中村家の跡地に建て設けつる、槍ケ岳開山の祖、播隆上人顕頌の石碑の御前に、斎主恐み恐みも白さく。

汝上人は今を逆上る二百年前、天明二年に格式高き中村家、中村隆観大人命の二男として生れ出で給い、生れ乍らに聡く賢く健かに信心篤く在わしめ給い、親友達と共に三枚滝や高頭山に遊び給う。長じては仏道を究めて山を修行の道場とし給い、遂には槍ケ岳を開き給い、仏の道を弘め世の人々に仰ぎ慕われ給う。

故其の御功を称え奉らむと、日本山岳会富山支部長中田清兵衛、大山町池田博達諸人相計り相語らい、其の業に秀でたる浜田石苑建設株式会社に事仰せて築き建てたる石碑も斯く美わしく事見えぬるにより、御饌御酒種々の味物捧げ奉りて除幕の礼事仕え奉り、日本山岳会富山支部結成三十五周年を祝い、汝上人御生誕二百和を寿ぎ、大山町の発展を祈奉らくを平けく安けく聞し召して、今ゆ将来此の底つ石垣の緩み傾く事無く、汝上人の御功は熊野川の弥清々に弥長く、高頭山の弥高々に弥広く、後々の世迄も仰ぎ慕わしめ給えと恐み恐みも白す。

＜神官　横越昭二＞

表は、ここにきて急速に詰まっている。「四、五年のうちには、残る四座をもいただく」と語っているが、もっと早い時期に完了することも考えられる。その年表をくってみる。

ナンガ・パルバート（①）に続いて、七二年にマナスル南壁（②）、七五年ガッシャーブルムⅠ（③）、七八年エベレスト（④、無酸素）、同年ナンガ・パルバート（単独、無酸素）、七九年K2（⑤、無酸素）、八〇年チョモランマ（単独、無酸素）、八一年シシャパンマ（⑥、無酸素）、八二年カンチェンジュンガ（⑦、無酸素）、同年ガッシャーブルムⅡ（⑧、無酸素）、同年ブロード・ピーク（⑨、無酸素）、そして今回のチョー・オユーも無酸素、固定ロープなしであった。

七八年に二座、八二年は三座と加速するが、八〇年のチョモランマでは危うく落命する場面もあった。「ナショナル・ジオグラフィック」よると、八月十五日午前五時、北東稜六五〇〇メートルのアタック・キャンプから単独出発、その直後スノーブリッジを踏み落してクレバスに転落、わずか一メートル四方のスノー・テラスに身を托し得て、奈落の底への転落をまぬがれた。この単独行、「チョモランマをあるがままに経験したい」と、無酸素、単独で体を張ったのだが、十五キロも体重減の苦闘が強いられ、アタックキャンプで待ち受けるカナダ人のジャーナリストで女流登山家のニーナ・ホルギンの手厚いもてなしを受けた。「もう一度登頂に成功するとは思われない。ぎりぎりだった」と語ったという。（片山全平）

カナダ山岳会

夏季キャンプ参加記（下）

斎藤　健治

マイクロバスに乗ると、運転手はジュディ嬢。やがて眠り込んでしまった。起こされて大型バスに乗換える。見るとバンフの街だ。店は閉っているがまだ人々の往来がある。新顔が乗り込んで来る。総勢三十人位になったところで出発。またもぐっすりと眠りこんでしまった。次に起こされたのは幅四十メートル位の川のほとりの、樹木を切り開いた空地。乗用車や、ワゴン車が六、七台乗り捨てである。中央に大きな網が広げてある。やっとヘリポートだと気付く。大きな荷物はその網の中に持込み、サブザックとピッケルだけで身軽になってヘリポートを後にする。午前八時だ。目的のキャンプ地には夕刻着けばよいとのこと。精々六、七時間のハイキングだという。

バンフはアルバータ州だが、このバガブー地区はブリティッシュ・コロンビア州に在る。日本の山道と変らない、草花や樹々の間を抜けてゆっくり登って行く。ただ蚊が多いのには閉口する。途中で会う連中は新顔なので挨拶するだけ。しばらくして林を抜け出ると日本庭園のような場所に出る。もう蚊はいない。先方の丘陵に雪が輝いている。途中から路がなくなったので、見当をつけて行く。やっと雪の丘陵に辿り着くと、眼下に広がるアルパイン・メドウの彼方に長蛇のようなバウエル氷河が懸り、その上に白雪を冠った尖峯が数限りなく輝いている。中でも一際目立つ雪を纏わぬ一大岩峯が天に突きささるように聳え立っている。これがバガブー・スパイアだ（一〇、四五〇フィート）。アルパイン・メドウの広がりが続く。雪渓から溶けた清水が咲き乱れる花々の中を音を立てて走っている。碧空はあくまで高く、一片の雲さえ見えない。

三つ目の丘陵を越えると、氷河の末端に点々としてテントが見える。今夜の宿だ。途中で、昨夜別れた連中が作ってくれた昼食を四方の景観を楽

門田のアイゼンが世に出た頃（上）

広瀬　潔

三月十日ルームで開かれた海野治良氏の「山岳史懇談会」で、門田のアイゼンとピッケルが、世に出てから何万と登山家の手に渡り、内地は元より海外にまで広く活躍している、と聞いて、感無量だった。

門田のアイゼンは今から五十余年前北大の一学生だった和久田弘一氏が考案したもので、同氏が最近書いた自叙伝『人生翔び歩記』（私家版・非売品）のなかに、当時の苦心談が述べられている。〈同書の紹介は後日平柳一郎氏が当会報上で行なう予定――編集〉

北大（予科～工学部）の学生で山岳部員だった同氏の優れた創意と若い熱情には敬意を表したい。更に北大教授陣の緻密な学術的指導と名人門田父子の並みなみならぬ製作協力が加わり、世界に誇る特殊鋼登山具が完成されたことは、岳界としても感謝の至りだ。

翌七年、完成品は東京の片桐テント店から大阪の登山具専門店主西岡一雄氏に紹介されたが、同氏に認められ、登山界に市販されることになった。

たまたま同年九月、好日山荘東京店が神田の小川町ビル内に開かれ、RCC会員海野治良氏が上京されて、営業を担当した。当時二十七歳の若さだった。私は海野氏から門田アイゼンの話を聞き、早速一足手に入れた。永年親しんでいる「冬富士」に登って、零下三十度近い低温下、堅氷や岩場で烈しく試めしてみたが、全く支障がなかった（すでに北大山岳部が十勝岳で実験済だったが、更に厳冬の富士山で確かめたわけだ）。好日山荘は確信をもって、門田の製品を登山家に売り出した。

またその年から偶然富士山頂に観測所が出来て、通年気象観測をすることになった。中央気象台の若い職員（その後も一生を富士山頂気象観測に捧げた藤村郁雄氏等）が交替で、冬期も上下する必要が起こった。

一方私はその頃から盛んに中央気象台（戦後は気象庁と改名）に出入りするようになっていた。それは「登山家」としてだった。

日本では大正十年頃から冬期登山が盛んになり、私も追随したが、遭難（特に気象遭難）が多発していた。少し気象を研究しようとしたが、適当な「気象の本」がない。昭和二年に中央気象台長岡田武松博士（東大教授）の「日本語の最初の本格的教科書」といわしみながら食べる。後からガイド二人が追い越してゆく。三時にテント村に着く。氷河の末端の広場が整地され、総数二十五張のテントが点在している。中心にカナダ国旗とクラブ旗がはためいている。五十人は悠に入れるメス・テント、厨房用テント、本部テント、用具用テント、集会テント（ここではいつでも紅茶が飲め、色々な掲示が貼り出される）。クラブ・マネージャーのマシューズ氏に挨拶する。丁度そこへ、クラブハウスで一度会ったことのあるジャック・ケイド氏が来る。彼は六十歳位で終身会員だ。彼と一緒のテントに泊ることになる。個別のテントは十人は寝られる広さ。それに二人きりとは何とも贅沢な話だ。

第一日目は前週からの疲労回復のため行事に参加せず、一日テントで休養する。テントの傍の三百㍍位の岩壁に野生の山羊が五匹位いる。どうしてあんな岩壁に攀じ登ったものか不思議に思う。所々に高山植物が咲いている。高山植物の可憐さは何処も同じだ。

二日目はウォーレス峯（九、六五〇㍍）の組に参加する。一組四人、二組で六時に出発する。氷河を横切り雪上を歩くこと二時間、岩壁の基部に到着。雪溶け水に渇をいやして登りにかかる。路はないので好きなところから取付く。登ること約一時間で雪のあるテラスに着く。暫く休憩。ここから見るバガブー峯、ピジョン・スパイア、ハウザー・タワーは見事だ。また登ること二時間、頂上に着く。途中の確保はハーケンを使用せず、スリングかフレンズだけであった。頂上では各人自己確保して、のんびりロッキーの大観をほしいままにする。昼食後登路を下る。四時テントに帰着。

三日目は元会長のヒンド夫妻にアメリカ婦人を加えて、バガブー峯一巡のハイキングに出掛ける。バガブーの向側に出て、雪渓を下り、コバルト湖に出る。コバルト湖は上から見ると、その名の通り黒に近いコバルト色に見えるが、傍へ行くと、水は湖底まで澄んでいてそんな色には見えない。帰路は美しい滝を越え、数日前キャンプ地へ来る時通ったメドウを横断、テントに帰る。道みちヒンド氏と雑談する。彼は現在カルガリーに住み、年令七十一歳という。小柄で、本会の三田元会長を想起させた。ザイルさばきも鮮かだし、その健脚にも驚いた。五、六年前に早稲田の女子学生が五名ばかり夏季キャンプに参加したことがあり、彼女等と東京で会って楽しかったとも話していた。

四日目は待望のピジョン・スパイア（一〇、二五〇㍍）に向う。同宿のケイド氏も参加。彼は二十数年前に一度登ったことがあるという。バウエル氷河を黙々と登る。二時間はかかっただろう。やっと岩壁の基部に着く。ここで大休止、ザックはここに置く。ガイド、私、ケイド氏、ラストに若い青年の順で岩に取りつく。チムニーあり、ディエードルあり、フレーク・クラックありで、ロック・クライミングの醍醐味を満喫する。眼下一〇〇〇㍍に氷河が光っている。落ちれば一巻の終りだが、不思議と恐怖心は湧かない。頂上の四畳位の岩の上に横になり、天空を見る。静寂そのもので、無限の至福を感ずる。

五日目はノース・ポスト・スパイア（九、五五〇㍍）に登る。頂上から一昨日巡ったコバルトが眼下に小さく横たわり、バガブー峯が目と鼻の先に聳り立っている。今度来たら是非登りたいとの希望が湧く。

六日目は次の日に山を下りるので、荷物の整理やらで半日を過ごし、午後アメリカ婦人二人を連れて、氷河を横切り、対岸のタムラックへ遊びに行く。ガレ場を登ってゆくと、二、三十㍍先に一匹の山羊がいる。こっちをじっと見詰める。こちらもじっと見る。と突然身を翻して岩蔭に消える。タムラックに着くと、これが自然に出来たも

れる『気象学』が刊行されたが、「どう登山に応用するのか」が分からない。それで時々気象台へ出掛け、岡田武松台長や藤原咲平予報課長（後に台長）の教えを受けていた（後で聞いたら、当時中央気象台に教えを乞いに来る社会人は私ひとりだったので、相談所などはなく、このような大家が直接質問に応じて下さったのだそうだ。これが縁になって、その後五十余年中央気象台から気象庁へ出入りするようになり、現在も山の気象研究会長を創立以来二十五年勤続している）。

話は前に戻って、昭和七年富士山気象観測所開設時には、堅氷用として「特種の金カンジキ」が考案された。昔から地元で使われていた「十字形四本爪」を改造し、「梯子型」や「格子型」に鉄片を組合わせて、爪数をふやした一見頑丈だが頗る重いものだった。

中央気象台観測室で相談を受けた私は、既に富士山で試験済の「門田特殊鋼アイゼン」の実物を見せたところ、「こんなきゃしゃなアイゼンで大丈夫か」と、首をかしげていたが、試験用に買い上げた七足が実際現地で好成績だったので、その後富士山頂観測所は元より、地元の強力たちも全部門田のアイゼンを使うようになった。

（以下次号）

数馬への冬路

柿原　謙一

田部（重治）さんを想いつつ数馬に泊って三頭山をやりたい、と考えたが、〝数馬はにぎやかになったそうだ。大寒中ならば静かだろう。〟—それがいいときめる。

山田（亮）さんが同行してくれるという。北秋川の小岩でバスを降り、浅間嶺にむかう。すぐに雪山路となり、小雪原のある浅間尾根休憩所について昼食。大岳や御前山を展望し、南の笹尾根をなつかしむ。

歩きやすい雪の尾根路を西へ辿る。これで田部さんが歩かれた路を、はじめて歩くことになったわい、と思った。大岳山が美しい。山田さんには懐しい記憶のある古い石祠のわきで少憩し、南秋川のバス道に降ってから、古風なたたずまいのある山崎屋に入る。

客は私たち二人だけ。「田部さんが泊った部屋」に案内された。入浴してからパイ一とする。静閑なる数馬の夜がきた。

田部さんがはじめてここに泊ったのは、大正九年四月末のことで、その感じのいいことから「数馬の一夜」が書かれた。その後、田部さんはときどきここを訪れ、ここに泊られたが、『忘れえぬ山山』に収められた「桧原村」の短文には、この村の自然と人生（太平洋戦争をふくむ）が、秋川の流れの滾滾として尽きないように、平和で親切で素朴であれかしとの祈りがこめられている。山崎屋の長男は田部さんが執筆する前に、すでに第三次ソロモン戦に海軍戦闘機で戦い、二十四歳にしてソロモンの花と散られていた。

いまの当主は、「私はまだ幼かったので、信濃追分に疎開された田部さんが、数馬でできた桶を背負って、峠ごしで信州に戻られたお姿を憶えているだけです。それが田部さんをみた最後でした」と語ってくれた。

地酒をくんでから夜具に入ったものの、大寒の夜に星冴える冷気は、障子のそとに凍りついている。

翌朝も快晴で、鞘口峠からは粉雪をふんで三頭の三角点をふみ、西原峠から鶴川の郷原バス停に下山し、上野原にむかった。

ついで二月の上旬、山田さんが浅間尾根東端の松生山にゆくので同行した。上川苔から浅間嶺に登り、東行してその三角点につく。さらに山路を東にゆけるので、標高点八五八米までゆく。そこで北東と東南にある二つの踏みあとを降ってみたが、いずれも急勾配や藪が厚いので、浅間嶺までひき返す。

日脚が伸びたと油断の報いで、山山に暮色はせまり、時坂への途中から松明（電池）をともして、真暗な路を降る。廃屋らしい山家の下にある車道にでて少憩。田部さんが野宿した付近だろう。山田さんは南中したオリオンを指さした。時坂をへて北秋川へ降る。

さてこの二回の山行で、田部さんが八王子から歩いた道のうち、時坂—浅間尾根—数馬と辿れた。私の満足もいいところだった。

アラスカの友人 ブライアン・ギャノンのこと

越田和男

のかと思われる庭園が突如出現する。大小の池が散在し、ベンチとおぼしき石があちこちに配置され、盆栽になるような樹々が所を得て点在している。全く驚いた。一つの池の如きは二十五㍍の人工プールと思っても不思議ではない。或いは野外音楽堂とおぼしき場所もある。二千㍍近い高台の上の、氷と雪と岩の峯々に囲まれた不思議なこの景観に度胆を抜かれた。

愈々キャンプを去る日。ケイド氏は後一週間残るという。お互いの健康を祈り別れる。往路を辿る。一週間前の雪は大方消えていた。ヘリポートに着いて荷物の到着を待っていたが、仲々来ない。故障だとのこと。その間、近くに在るたった一軒のレスト・ハウスに寄って久し振りにビールにありつく。入口に登山靴を脱いで下さいと書いてある。

バスで再びバンフへ行き、そこからガイドのクロックワース君の車でキャンモアのクラブハウスに帰る。午後八時だ。米人二人の仲間に誘われて麓のキャンモアへ行き、遅い夜食を摂る。就寝したのは十一時だった。

翌朝、帰国の支度をして、バンフに赴き、買物をし、クラブの事務所を訪ね挨拶をした。そして、ツーリストとしてジャスパー行のバスに乗った。

帰国後暫らくして、貴殿をカナダ山岳会の正会員として認める、お目出度うとの来信があり、晴れてバッジの着用が許された。

最後に、二週間にわたる若い山仲間達との交遊では、約八十名の人達のうち、一人を除いて喫煙する者がいなかったことと、飲酒する人が殆どおらず、ビールまたはワインを食前、食後に嗜む人が数人いた程度だったのには驚いた。（完）

「山」四月号（454号）の図書受入報告に Brian L. Gannon 氏寄贈になる十数冊の、主としてアラスカ関係の本にお気づきの方もあろうかと思う。友人ブライアンのことを少し紹介しておきたい。

ブライアンは現在アラスカ大学に籍を置き、天然ガスのパイプライン建設の自然環境に及ぼす影響などにつき連邦政府との契約による調査の仕事に従事している。

ブライアン・ギャノン

専門は地質、考古、人類学などとなかなか幅が広い。私と知り合ったのは十数年前で、彼がオレゴン大学の地質の学生で、大学のアルパインクラブの会長をしていた時だった。よく一緒に週末の山行や、遠くカリフォルニヤまで足をのばしての岩登りなどに出かけた。また家族ぐるみの付き合いを楽しんだ仲でもあったが、どういう訳か彼はまだ独身である。

以来、十数年手紙のやりとりだけとなっていたのが、昨春、急に思い立ったのか二週間の休暇を日本で過ごしたいと言ってきた。生憎小生が休暇をとってフルにアテンド出来る時期でなく、広々としたアラスカから東京の狭いマンションのわが家に彼を迎え、どうやって日本の休日を楽しんでもらおうかと大いに悩んだあげく考えついたのが上高地の山研だった。日本語の出来ない彼を新宿駅から送り出し、少しは心配したのだが取り越し苦労というもの。山研に電話を入れると、ことのほか彼の地を気に入り、同宿の藤江幾太郎画伯や山崎金次郎さん、管理人の島田さん夫妻と結構楽しくやっているのだった。二泊の予定が四泊になり、すっかり上高地、山研、JACファンになって帰って来た次第。藤江さん、山崎さん、島田さん夫妻の暖かいもてなしには改めて御礼申し上げたい。

本の寄贈は、東京での一夜、ルームに案内した折、図書室にアラスカ関係の本が意外に少なかったのに気付いた彼が、帰国後、アラスカの山の訪問者の必読の書として選び送ってくれたものである。また、小原君達の山行計画に役立つようにと、こちらでは入手し難い何枚かの地図を送ってくれたりもした。

すっかり日本ファンになった彼の再訪日計画には、きっと上高地、山研行が入っていることだろう。今度は是非同行したいと思っている。

（図書委）

お知らせ

定例講演会

日時　七月十五日（金）十八時三十分より

演題　最近のヒマラヤ登山

講師　池田常道氏

——海外委員会——

第二十回「この一本展」（1）

——図書室所蔵貴重本——

第二十回を重ねた今回の「この一本展」は、現在図書室で所蔵している貴重本類を中心に出品し、期間も三日間（二月十九日～二十一日）にして展示した。

出品した三十一点のなかには、日本山岳会編『高山深谷』（第一輯～第八輯）、辻村伊助の『スウィス日記』の肉筆原稿などきわめて貴重なものも含まれており、来会者の多くの関心を集めた。

以下はその出品目録からの転載である。

（図書委員会）

一　和書の部

一、木暮理太郎著『山の憶ひ出』上下巻特装本百冊の内第十四番、東京・竜星閣、上巻昭和十三年十二月、下巻昭和十四年六月発行。

元本会々長木暮理太郎の着衣銘仙のかすりを装幀に用いてある。（神谷恭寄贈）

二、松方三郎著『アルプス記』特装本、愛蔵版七十冊の内第四十五冊、東京・竜星閣、昭和十二年六月発行。

著者サイン入り、山岳随想をまとめたもの。（神谷恭寄贈）

三、小島烏水著『氷河と萬年雪の山』特装本、五十部の内第二号、東京・梓書房、昭和七年七月発行。

小島烏水署名あり。烏水米国滞在中の研究を中心とした名著。（磯野計蔵寄贈）

四、小島烏水著『アルピニストの手記』書物展望社、昭和十一年八月発行。

特製百部限定、署名入り。

この表紙は六角紫水門下の島香衛の図案と蒔絵からなり、山と動植物が図案化されている。

口絵には特に著者の後輩西田武雄により、著者の像がエッチングとして一葉宛挿入されている。（中屋健式寄贈）

五、小島烏水著『偃松の匂ひ』書物展望社、昭和十二年九月発行。

斎藤昌三装幀、茨木猪之吉装画、図版口絵青木繁作「惜春」、谷文晁筆「岩手山」等十種。

本書は、著者烏水から木暮理太郎への献呈本である。（神谷恭寄贈）

六、小島烏水著『山の風流使者』岡書院、昭和二十四年七月発行、特刷本二百部の内第十一号。

最後の著書、巻末に終焉記、年譜、著作目録がある。（神谷恭寄贈）

七、日本山岳会編『小島烏水追憶』岡書院、昭和二十四年十二月発行、特刷本百冊の内七十三冊。

山岳第四十四年第一号の特刷本、槙有恒、武田久吉外各氏が烏水について書き、巻末に年譜、著作目録、解題などがついている。（磯野計蔵寄贈）

八、槙有恒著『山行』東京・岡書院、昭和二十七年七月発行、戦後版特装本、三百冊の内第九冊。

大正十二年改造社版に、アルバータ登山記を加え新しく発行されたもの、著者のサイン入り。（磯野計蔵寄贈）

九、エミール・ジャヴェル著尾崎喜八訳『一登山家の思ひ出』竜星閣、昭和十二年八月発行。

愛蔵版七十冊の内第一冊（訳者毛筆署名入）

木暮理太郎の蔵書印と寄贈者神谷恭の蔵書

俳句

タクコーラの旅より

川崎精雄

ガーラ

葬列のまむかひ冬のダウラ・ギリ
冬岳へわめきて葬の泣き女
霜の道葬列の人みな裸足
霜の道葬列ひたにガンダキへ

チィニー

朔風や雪嶺望む城郭都市
城郭都市麦そだつ野を繞らせり
朔風の砂塵かぶりてそだつ麦
朔風の屋根にラマ教の旗破れ

＊　＊

白き山々

——三水会ネパール トレッキングにて——

小林碧郎

ヒマラヤに舞ふ一月の岩つばめ
柴負ふや乙女の腰にククリ冴え
夜焚火や氷河抱きて嶺並ぶ
ポーターの暁の祈りに霜強し
雪礫破顔シェルパの髭濡らす
月冴えて氷河あふるゝ嶺の肩
初鶏を聴く寝袋に身をまるめ
初あかり氷瀑の谷天に在り
山の菜の瑞々しきを雑煮汁
雲表に凍てゝけわしき塩の道
榾あかり山家は牛と共寝して
鷲の棲む尾根を拓きて村古りぬ
冬うらゝ裸足の子らに飴頒ち
雪嶺の覗く棚田に牛はなつ
菩提樹に倚りて童子の蜜柑賣

福島支部より 寄贈の鐘

会報454号で福島支部が報告している、同支部三十五周年記念の真鍮製の立派な鐘が会に寄贈された。山研で利用できそうだ。

—報告—

スキー登山技術講習会

指導委員会

快晴下午後の入山。他会の踏跡を深追いした故に、下弦の月と吐く息の白さが見える頃、漸く諸氏の待つ京大ヒュッテに到着した。既に団らんも終りに近かった。

三月二十日　霧が残っていたが出発準備中に昨日同様好天となる。

若手の人達を先頭に長い列。三日程前の荒天が最後か、樹々を吹き抜けてくる風は間違いなく春風。

一丁場で小休。黒沢沿いの今日のコース説明。四十上がったのみ。濃い木立、口を開けた沢を避ければ何処にでもコースが採れるのが早春の特権。二丁場の小

印がある。尾崎喜八が第一番本を木暮理太郎に献呈したものを、後に神谷恭が戴いたものと思われる。

十、河口慧海『西蔵品図録』東京画報社、明治三十七年三月発行。

著者が西蔵より招来した仏像、器品の写真集。（府川裕寄贈）

十一、武田久吉編著『富士山』日本地理大系別巻、改造社、昭和六年九月発行、五十部限定のうち四十七番。

刷本五十部を会で購入の上、特別の装幀を施し、うち二十部は海外主要山岳会に送呈し、三十部を希望者に頒布。特装本作成の経緯は会報第一〇号参照。（島田巽、喜寿を記念して寄贈）

十二、日本山岳会『高山渓谷』第一—第八輯、東京、日本山岳会編、明治四十三年～大正六年発行。本会編輯になる山岳写真集、きわめて珍しいものである。（小林義正寄贈）

（解説）

別装『富士山』について

島田　巽

この特装本が造られた経緯は、本会会報第一〇号（昭和六年十一月刊）に記されている。同号七ページの会務報告欄に次のような記事がある。

別装『富士山』予約お知らせ

会員武田久吉氏著『富士山』が去る九月、改造社の日本地理大系の別冊として発刊されたことは、既に会員各位ご承知のことと思います。

この『富士山』に収められた写真がいかにも見事なので、本会に於て刷本五十部を購入し特別の装禎を施して、本邦代表的名山紹介の意味を以て、海外の主要山岳会に送呈することに致しました。

主要山岳会の数を二十とし、残部三十部をご希望の会員諸氏にお頒け致したいと思うのであります。

ご購求ご希望の方は左記お含みの上至急お申込み願います。

昭和六年十一月　図書係

一、限定三十部限り
一、頒価一部四円位
一、申込みは本会図書室宛のこと

右のように特装本は市販用の刷本を用い装幀だけを新たにしたものである。したがって表紙、見返し、本扉が、それぞれ別装として意匠をこらされている。藍色の綿布を用いた表紙にも本扉にもFUJIYAMA の文字が併記され、JAC のマークが印されているのは、海外山岳会への贈呈を考慮してのことだと思われる。別装の表紙と本扉は富でなく冨・士山と記されており、本扉の裏には英語で会名とともに五十部限定であることが記されている。

すでに半世紀を経ているので、国内における残存部数も多くはなかろうと思い、喜寿を迎えた記念として、本会の蔵書のなかに加えていただくこととした。なお本会図書室には、磯野計蔵文庫に既に一冊が蔵されているはずなので、別にめずらしいものではないが、半世紀前の図書係のアイディアと努力とを偲ぶ意味もあろうかと考えてのことである。

武田博士のこの著作については、やはり会報第一〇号に、藤島敏男氏執筆の図書紹介が掲載されている。（昭和五十七年一月二十五日）

（以下次号）

休では山の説明があったが、北アの山はまだ見えず、後になって眺望佳く、朝日岳から鹿島槍付近まで見えた。夏路十二曲りの石黒沢には小さな雪玉の波が見られたが心配なく、一個所口があいていただけ（一六五〇メートル付近）。黒沢のどの辺りで地図を確認したが、既に先頭グループは間違って東へ入っているも好天なのでそのまま。三田原山北西肩より黒沢池雪原に出、小休後茶臼山右鞍部へ。二登りの後、雪でせり上がった頂上に着く。居心地はあまり良くなく引き返す。肩より黒沢池雪原までは各自足前の見せ場。斜面には巧拙それなりの模様が画かれた。春風にうとうとなる雪原の大休み。

雪原の端より再び滑降開始。華麗、豪快、キックターン等もあって充分楽しめた。

登りに遅れた参加者の一人が骨折という異常事態となり、以後搬出組と一般組に分かれ、急造スキー橇の患者には浜口医師が付添う。一般組は気を引締めてこれらを考慮した滑降で小屋に無事到着。応援に一名がとって返した。夜は軽量化、安全対策等最近の山スキー用具や医療について質疑がなされた。

三月二十一日　湿雪から雨に変り搬出組が先行。あと始末後一般組が下山。池ノ峰南でスノーモービルに患者を移送し下山。雨のスキーツアーは快適ならず。妙高国

図書紹介

チョゴリ登山記二冊と K2西稜登攀記

片山　全平

NHKが『喬才里峯登頂記』を、朝日新聞社が『チョゴリへの道』を、両社とも出版部門をかかえている関係から、超スピードの作業で昨年暮同時出版した。前者は標題の通りの登頂経過であるが、後者は写真を主体としていて合わせて一本というところ。というよりも、読み、かつ眺めるという両者の活用によって、「地図の空白部」などといわれた史実を背景に、この長いアプローチの果ての登頂に興趣尽きないものを覚えさせる。

『登頂記』は、要所要所で主役となった各隊員による手記を〝アップ〟する。つなぎとして小西登攀隊長の解説的な〝ナレーション〟を配するという手際のよい手法で展開する。特に七登頂隊員によるそれぞれの登頂手記は、そのぎりぎりでの過酷さの中に個性を浮き立たせて迫真力を持つ。

さらに『チョゴリ』によって、百聞は一見にしかずというか、数々の今井カメラマンの労作が実感を湧かせ、山田記者のコンパクトなコメント、特に巻末の風物誌が仕上げの役目を果たしている。が、一騎当千の強者が演じたこの壮挙、しかも対象は、久々の蔵出しの名骨董品（喬才里）、時間をかけて書きこんだ登山記の上梓が望まれる。最近のものにはボニントンの『KONGUR』もある。

次に発刊が待たれていた早大の『K2西稜初登攀報告書』、二年越しでやっと日の目を見た。百ページにおよぶ写真（撮影は主に小松義夫カメラマン）。色調をダーク・ブルーに落して荘重な旋律の効果をあげ、記事三十九ページは、並の逐条的な記録を排し、登頂前後の交信内容をクローズアップ、TV効果というか、ユニークな報告書となった。

例えば、写真第一ページの「コンコルディアでK2がはじめてその偉容を現わした」で、砕石のかなた、濃紺の空をバックに白銀に輝くK2を浮かべて、登高への期待感を印象づける。この写真を含む「美しきカラコラムの峰々」の一連の項のなかに、ポーター五人衆の動と静の姿態を挿入する手法も心にくい。以下、「カラコラムの人々」「カラコラムの表情」「登攀が始まる」「頂上アタック」の五章に収められているが、「登攀が始まる」のなかの「初期のルート工作は順調に進んだ」「ルートから見下すベースキャンプ」は、トレースを画面一杯に、人物、テント群を点景として詩情があふれる。

交信記録――これは一つのドラマである。どんな名文も、心の通った仲間同志の、切羽詰った時点での生のやりとりには及ばない、ということを痛感させられる。下手な紹介記事よりも一読にしかず、と思う。

『喬才里峯登頂記』昭和五十七年十二月二十日、日本放送出版協会発行、日本山岳協会登山隊・NHK取材班著、二七二ページ、千六百円

『チョゴリへの道』同、朝日新聞社発行、八二ページ、千五百円

『K2西稜初登攀報告書』昭和五十八年三月十五日、早稲田大学K2登山隊発行、三千八百円

低山讃歌

野口冬人著

低山讃歌と題した第一部（紀行）と、山への断想、山岳会とは何か、山あるきノート、と題した随想三部作より成る。冒頭の「棒ノ折山」がもっとも良い。何十人もの群が続々登るこのような小さい丘陵には、山男はとかく違和感を持ちたがるものだが、著者は、手提げバッグや紙袋程度の支度の人たちに、いくらか心配しながらもその雰囲気に溶けこんでいる。散らなかった紙屑を集めて燃やし「寒いから焚火の材料にしただけで、善行をしたわけではない」というのもいい。おだやかな著者の人柄がほうふつとしている。淡々とした筆致であり、季節感もよく出ていて、険しい山のものや長いものや感情過多のものが、必ずしも紀行でない、と言っているようだ。

「早春の軽井沢」で、バスの車掌が車を停めて「写真をゆっくり撮りなさいよ」と言う場面もいい。著者の文はこうした点に重点が置かれ、コースの叙述は簡略にしてある。低山讃歌だから、この方が味がある。阿武隈、西上州、那須、道志、巻機とそれぞれ興趣がある。「桧枝岐紀行」が、風土記や村史や農産物や民芸にふれながら、前記諸篇と異るのは、ドライブ旅行だからと思われる。

「山岳会とは何か」の部では「国内遠征」が面白い。日本の山なんかせいぜい三千メートル、とけなす海外遠征の人たちへの皮肉で、相当小気味よく読めるが、同時に、それなら国内の遠征場所は何所か、という点

際スキー場でも滑りがよくない。駐車場付近の食堂でまたの再会を約して解散した。

参加者 林桂子、山中富士夫、萩原賢司、荒野康子、伊藤明機、千葉重美、入沢郁夫、織田沢美知子、太田繁、林邦明、原謙一、内山城、八重樫朱実、松本美恵、井上貴美枝、浅井葵、小森泰三、作間昭子、鳥海宣和、小林政志、桐生恒治、村木秀夫、片岡泰彦、丸岡博昭、三沢幸夫、大谷亮、浜口欣一他三名（以上東京）山崎幸和、早川英夫、坂井厚（以上越後支部）計三十三名。

（坂井　厚）

―山岳図書を語る夕べ―「山の本あれこれ」

講師　山崎安治氏

昭和五十八年二月十九日（土）午後四時より　ルームにて

今回は恒例の「この一本展」と併せて「山岳図書を語る夕べ」が開かれた。最初、講師に石原巌さんをお願いしたのだが急逝され、その後お願いした諏訪多さんも病気で出られなくなり、急きょピンチヒッターとして委員長の山崎さんにお話し願うことになった。

（図書委員会）

＊

山の本を意識し始めたのは『子供の科学』という本にあった山の写真を見てからだった。中学の頃旅行部に入って、昭和九年に上高ではたと困っている。そこがまた面白い。

山岳会とは何か、についての組織、地域研究、経理、会報等数篇は著者の属する山の会の会報に載せたもので、「仲間のあり方と共にあわせて一般的な山岳会のあり方を記したので、やや仲間の山の会主体の論稿になっている」と断わってある。従ってそれだけの意欲で採用したのだろうが、単行本に載ると少し気になる。要点を抜いて別の一文にしたかったように思う。

それから本書の中に、健康の具合で山を休んだとか調子が出ない、などの場面がよく出る。書いた月日や発表誌が違うのだからやむを得ないが、そんなにこだわらずにたまには書かない方が、文が生きると思うがどうだろう。あとがき、奥付、裏表紙、その見返し、には著者の略歴や紹介が載っている。これも或る程度整理した方がすっきりしたであろう。

昭和五十七年七月、現代旅行研究所、千六百円

（川崎精雄）

四姑娘山―一九八一　同志社大学山岳部編

同志社大学山岳部による一九八一年七月、四姑娘山（六二五〇㍍）初登頂の正式報告書である。四姑娘山は四川省の成都西北約二百㌔にあるチュンライ山脈の主峰で、北から最高峰四姑娘山、三姑娘山（五三五五㍍）、二姑娘山（五二七六㍍）、大姑娘山（五〇二五㍍）の四峰が南北に並んでいる。

この未登峰の登山を計画した一九八〇年五月に始まる中国側との折衝から、偵察行、登頂成功の経過が「実現までの経緯」、「第一次登山隊記録」、「第二次登山隊記録」、「ブロッケン」、「各係報告」、「終章」と六章にわたりくわしく報告されている。

登頂は七月二十八日、二十九日と主峰へ二度。三十日には北峰の登頂に成功する。

登山の報告書、ことに海外登山の報告書はいろいろ出されているが、中にはいつ、だれが、どこを登り、何をしたか、という基本的なことがあいまいなものもあるが、この報告書はこの点きわめて段取りよく編集されており、また登頂後いち早くこのような立派な報告書が出版されたことは大変な努力だったろうと思う。中国登山に関する重要な文献として残るものであろう。

昭和五十七年十月二十四日、同志社大学体育会山岳部発行、五千円、入手希望者は送料五百円をそえ、京都市上京区烏丸今出川、同志社大学内、玉村和彦あて申し込めばよい。

（山崎安治）

南会津郡西部の山と谷　上下　郡山山岳会編

昭和五十五年に『南会津郡東部の山』が刊行されたとき本誌に紹介した記憶があるが、それから三年たって『西部の山と谷』上下二巻が発刊され、これで郡山山岳会が当初企画した南会津郡の山と谷の探究がひとまず終った。

上巻にとりあげられているのは、只見北部（貉ケ森山、雲河内根山、高幽山、小金井山、小金花山、東岐山、笠原山、蒲生岳、鷲が倉山、柴倉山）、浅草岳の山と谷、田子倉湖西岸（前毛猛山～未丈が岳）、会津朝日岳・駒ケ岳山域（塩ノ岐川周辺＝辰巳山、間々野貝山、大博多山、大窪山、古町丸山、尾白山、大根下山、赤羽根山、黒谷川東岸＝城郭朝日山～小沢山恵羅窪山、小手沢山）であり、下巻では右に続いて、会津朝日岳を巡る山と谷、丸山岳を巡る山と谷、田子倉湖南の山と谷、坪入山周辺の山と谷、会津駒ケ岳を巡る山と谷について克明に纒められている。

郡山に在住する会員が多いので地の利を生かしたとはいえ、こんな山までもと思うような、いままで登山者に全く知られていない山についても述べてあり、また本書の最大の特色ともいうべき、多くの沢登りについてよく記述されていて、この方面を志す者に大きく寄与すると思う。

特に筆者に印象を与えたのは、巻頭の「南会津の登山を考える」の末尾に書かれている南会津を愛する心の一節であり「私達は南会津に住む人々への思い遣りを持てる人間でありたいといつも心掛けている。…」また「山は、そこに生活する人々を抜きにしては語ることは出来ない。…」等の心である。これは本文中屢々繰り返されているこの会の心と言ってもいいが、自然破壊防止の強い希求と共に本書を特色づけ、読者に共感を与えずにはおかない。

本文中に写真地図を豊富に載せまた下巻には折込みの展望写真を添付してあり、写真のなかには山村や民俗にかかわるものもあって楽しませてくれる。

会員諸君の汗と焚火の臭いをまざまざと感じさせてくれるような好著と言っていいだろう。

昭和五十八年三月刊、A5判総アート紙上巻三五〇ページ、下巻三七四ページ、各二千五百円

（望月達夫）

地へ行ったが、その時は天気が悪く乗鞍を往復しただけだった。

ウインパーの『アルプス登攀記』を見て山の凄さを知ったのは中学上級の頃であった。当時、同期生だった金坂一郎氏とはよく谷川岳へ行った。その頃、金坂氏は十一月の富士山へ登ったりしていた。二人で餓鬼岳から槍へ行った

お知らせ

自然保護全国集会

自然保護委員会

日時　昭和五十八年八月二十七～二十八日

集合場所　山野スポーツセンター立山地鉄立山駅よりバス三分

TEL（0764）81-1505

集合時刻　八月二十七日（土）十五時。（立山駅十四時五十分発極楽坂行バスに乗車。家族旅行村下車）

予定

二十七日

十五～十七時　全国集会

十七～十八時半　自然保護講演（講師は、環境庁　大田正黔氏並びに　富山県自然保護課長　林伸雄氏）

十九時より懇親会

二十八日　八時出発　専用バスで称名滝経由立山。富山県ナチュラリスト五名による沿線説明、ナチュラリスト活動並びに自然保護センターの見学

十二時　室堂で昼食　解散

地図　五万分一　立山・五百石

費用　一万円（含　宿泊、三食バス代等）

参加者　本部並びに各支部の自然保護委員と一般会員

申込期限　七月末日

申込方法　住所・氏名・会員番号・年令記入の上、日本山岳会気付自然保護委員会に申込む。先着五十名に受取の返事及びコース詳細など送付します。

主催　日本山岳会自然保護委員会

共催　日本山岳会富山支部　富山県自然保護課

備考　二十七日山野スポーツセンターに早く着いた場合、ゴンドラで極楽坂山、大品山などの散策ができます。

また二十八日解散後の立山周辺は比較的人出は少ないとのこと。

お知らせ

第二十六回　もみじ会予告

静岡支部

日時　五十八年十一月十二日～十三日

会場　朝霧野外活動センター

集合　東海道線吉原駅南口十四時三十分貸切バスにて会場へ向かう。懇親会は十八時より二十時まで。（東海道線は上りが十四時十四分、下りが十四時十一分吉原着という列車あり）

山行　富士御庭下り

十三日六時三十分起床　朝食七時三十分　八時貸切バスにて五合目まで　到着九時半→御庭→浅黄塚→三合目料金所（途中で中食）、十四時待機する貸切バスにて吉原駅着十六時（東海道線上り十六時十四分、下り十六時十一分に連絡）

会費　七千円（バス利用の有無、途中参加に関係なく同額）はJAC静岡支部郵便振替口座　名古屋四－二三六一〇　への振込みをもって正式申込みとする。

なお、山行を希望しない者は貸切バスで山麓回り三合目料金所へ。荒天対策は別に考えます。

⊙現地連絡場所

昼間0545-61-8410　田辺外科

夜　0545-61-3154　田辺自宅

こともあった。

冬山の技術書である藤田信道氏の『積雪期登山』に早稲田の山岳部の歴史があったので、これにひかれて早稲田に行くことにした。

大学に入って舟田三郎氏の『岩登』を見て、岩登りというもののあることを知った。

山岳部では岩本七郎氏から大島亮吉の『山』を読むよう薦められ、山登りには静的なものと動的なもののあることを知った。感銘を受けた本だった。

小島さん、高頭さんなどの本も沢山古本屋にあり、安く手に入った。各大学の部報をよく読んだが、中でも慶応の『登高行』九号などは傑出しており、積雪期高所露営研究には大変役に立った。この点早稲田の部報は立ち遅れていた。

当時の剱岳八ッ峰などの積雪期登山を見ると、慶応パーティの行動は冷静着実で、吹雪いている時は谷筋を歩かずの伝統を守り、翌日の晴れ間を縫って、他大学をしり目に余裕をもって目的を果たしている。この頃の立教の部報を見てもナンダコートにつながるような充実した山登りを後立山や剱で行なっている。

『山と渓谷』、『ケルン』といった雑誌もあったが、充実したものは少なかった。

大学在学中、戦争になり、新刊の洋書が読めなくなった。先輩の訳したものを回し読みしてヒマラヤのことを知った。銀座の教文館や伊勢佐木町の有隣堂にはスマイスの本や、ウワークマン夫妻の『コール・オブ・ザ・スノウイ・ヒスパー』などが並んで安く手に入った。

繰り上げ卒業で軍隊に入ってからはチェリー・ガラードの本を買ったりしたが、家へ置いておき、家へ帰った時に読んだ。また佐倉や神戸へ行った時はそこの古本屋を見て回り、富田砕花の『登高行』という詩集や、今西さんの『山岳省察』などを求めた。中国の南京に行った時には『山岳』が沢山並んでいて驚いた。

昭和二十年の横浜空襲で家が焼け、折角買い集めた本が全て灰になり、焼け跡にはピッケルの頭だけが残っていた。

戦後になってまた古本屋を歩き本を買い集め出したが、焼けてしまった本は仲々あきらめきれなかった。

日本山岳会の図書室も、もっと図書を充実して立派な山岳図書館に育って欲しいと思う。

ルーム日誌　（58年4月）

4日（月）書評委
6日（水）海外委
7日（木）海外委
8日（金）科学委、常務理事会
9日（土）指導委

10日（日）カンチ準備委
11日（月）理事会
13日（水）学生部総会、山研委
14日（木）評議員会
15日（金）会員懇談会
18日（月）図書委
20日（水）三水会
22日（金）科学委
25日（月）委員会連絡会、フィルム委
28日（木）指導委員会

今月の来室者561名

会員移動（4月）

退会
8888　田中　勝子
夫婦会員へ
7923　山田　知子
9292　山田　昭一
物故
1257　加藤　泰安（4・24）
245　矢田　城太郎（4・18）
6835　樋口　明生（4・19）

後記

▼今年度から左記のメンバーで〝山〟の編集を担当することになりました。何とぞよろしく御協力のほど、お願いいたします。

▼御承知のように、この〝山〟は本会の広報誌であると同時に、会員相互の交流を深める広場でもあります。ニュース、エッセイなど、活発な御寄稿をお待ちしております。

▼原稿の締切は毎月十日です。同日までに、113東京都文京区本郷、東大史料編纂所、皆川まで到着するよう御配慮下さい。

顧問　田口　二郎
委員長　山崎　安治
委員　大森　久雄
岡沢　祐吉
小倉　厚
片山　全平
近藤　信行
松家　晋
担当理事　皆川　完一

会費納入をお忘れなく
事務局

昭和五十八年六月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　佐々保雄
編集代表　皆川完一
電話東京（261）四四二三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂